

ローカル線で行く！ フーテン旅行記 2 -首都圏ミニトリップ-

岡山大学 工学部 機械工学コース 助教
大西 孝



専門は機械加工（研削）。主に円筒研削や内面研削を対象として、工作物の熱変形や弾性変形に伴う精度の悪化を防止する研究を進めている。趣味は列車を使用した旅行（47 都道府県を踏破済）。

はじめに

6 月は祝日のない月です。梅雨の時期とも重なり、どこか遠くへ旅行に出ようという気分にはあまりならないかもしれません。しかし、大都市の中をひたむきに走る通勤通学路線にも、旅情を感じることができる路線があります。今回は首都圏を走る、週末のミニトリップに好適な2路線をご紹介します。

1. 大都会のローカル線！鶴見線

ローカル線といえば、地方を走る列車の運行本数が少ない路線というイメージがあります。しかし列車の運行本数が極端に少なく、「ローカル線」と呼べる路線が首都圏の神奈川県に存在していることはあまり知られていません。

今回ご紹介する大都会のローカル線は、鶴見線。横浜市鶴見区の鶴見駅と川崎市川崎区の扇町駅を結ぶ、京浜工業地帯のど真ん中を走る路線です。さらに鶴見と扇町を結ぶ本線の途中から2つの支線が分かれており、一方は海芝浦（うみしばうら）駅、他方は大川駅まで伸びています。大川駅は周辺の工場への通勤客が利用するため、電車は朝夕しか運転されず、平日は9回、土休日は3回しか発着



支線の終点、大川駅に到着した電車。ここは100万都市、川崎市内にありますが土休日は3回しか発着がありません。

がありません。土休日だけとはいえ、1日に3往復しか列車がやってこない駅は全国的にも稀で、北海道や中国地方の過疎地域にあるだけです。こんな駅が150万近い人口を擁する川崎市にあるのですから驚きです。



大川駅の出口。木造の駅舎や改札口に懐かしさを感じますが、駅員さんの姿はありません。

鶴見線には、他にも面白い特徴があります。利用者の大半が沿線の京浜工業地帯の通勤客であるため、朝晩は多数の列車が運行される本線でも、平日

の昼間は40分、休日は1時間程度、電車が来ない時間帯もあります。さらに、定期券の利用者が多いためか、東京や横浜への乗換駅である鶴見駅を除いて途中の駅はすべて無人駅で、切符の精算は鶴見駅で済ませてしまい、列車から降りる際は駅に備え付けられている集札箱に使用済みの切符を入れるだけです。



こちらは本線の浅野駅。工場地帯にある無人駅で、殺風景な風景が広がります。

したがって、鶴見以外の駅には集札箱と自動券売機、SuicaなどのICカードの読み取り装置があるだけで、ローカル線の小さな駅と大差ありません。

また、もう一つの支線の終点である海芝浦駅は、「芝浦」の名前から想像できるように東芝（旧 東京芝浦電気）の京浜事業所の敷地内にあり、駅の



もう一つの支線の終点、海芝浦駅。ホームの横には京浜運河が広がり、晴天の日は景色が楽しめます。

出口が東芝の守衛所になっています。そのため、東芝の社員や事業所に用のある人以外は駅から出ることができません。ただし、駅の改札の手前に「芝浦公園」という小さな公園が設けられており、線路沿いの京浜運河の景色を眺めることのできる憩いの場になっています。この地域では夜景スポットとしても有名だとか。

沿線にはとにかく工場が目につき、殺風景な景色が多いですが、途中の駅は高度成長の時代から取り残されたような、何か懐かしさを感じさせる駅も多くあります。横浜周辺へお出かけの際は、大都会のローカル線、鶴見線へ足を延ばしてみたいかがでしょうか。



川崎市側の終点、扇町。貨物列車用の線路が広がる構内の片隅に電車は到着します。



扇町駅の駅舎。駅の出口にはバラの花が咲き誇るアーチがかかっており、無機質な駅舎と対照的です。

(岡山大学職員組合 組合だより159号より再掲)

2. 寅さんの街 柴又を訪ねて！ 京成金町線

「わたくし、生まれも育ちも葛飾柴又です……」で始まるセリフ。そう、「フーテンの寅」こと、車寅次郎が映画「男はつらいよ」のオープニングで必ず発する有名な口上です。渥美清さんが亡くなって、もう20年近くがたちますが、まだまだ寅さんの人気は衰えを知りません。今回ご紹介する寅さんの故郷、東京都葛飾区の柴又是、多くの寅さんを慕うファンで今でも賑わっています。

柴又へは、京成電鉄の金町（かなまち）線が便利です。金町線は京成本線の京成高砂駅と、JR常磐線の金町駅を結ぶ全長わずか2.5kmの支線で、途中の駅は柴又しかありません。葛飾区のまさに下町というところをゆっくりと走っています。実はこの金町線、しばしば「男はつらいよ」にも登場しており、柴又を出て地方へ向かう寅さんが柴又駅から電車に乗る場面、場合に

よっては妹のさくらが見送りにくるシーンが印象的です。柴又駅の改札を通ると、まず目に入るのが寅さんの銅像。トランク片手にこれからどこかの地方に行くのか、あるいは柴又へ久しぶりに帰ってきてホッとした表情なのか。いつもの帽子に腹巻、雪駄姿の優しい表情の寅さんが出迎えてくれます。



柴又駅と寅さんの銅像。トランク片手に、映画でお馴染みの姿で出迎えてくれます。



京成高砂駅で発車を待つ電車（左上）。電車の側面には寅さん記念館の宣伝があり、柴又に着く前から気分は高まります。残念ながら、この車両はすでに引退しています。



柴又帝釈天の門と、参道になっている商店街。まさに下町といった感じです。ちょうど幼稚園児がお参りに来ました。

駅前から映画でおなじみの商店街が続きますが、今でもどこことなく懐かしさを感じる雰囲気の通りです。商店街を抜けると、これもまた映画でおなじみの柴又帝釈天に着きます。帝釈天の境内は青々とした松が茂り、細かい彫刻が施された建物が並び、都内でありながら落ち着いた雰囲気に包まれています。



柴又帝釈天の境内。
青々と松が茂り、落ち着いた雰囲気でゆったりと時間が流れます。

さらに帝釈天を出て江戸川へ向けて少し歩くと、「葛飾柴又寅さん記念館」があります。ここでは実際に映画の撮影で使われた団子屋「くるまや」のセットが展示されています。まさに映画の世界が目の前に広がり、今にも寅さんと周りの人々の会話が聞こえてきそうです。また、館内では「男はつらいよ」の名シーンがダイジェストで上映されているほか、寅さんの衣装やトランクの中身の展示、寅さんが地方で商売をするときに使う馴染みの口上の一覧、歴代マドンナの写真など、映画をご覧になったことのある方には懐かしい、そうでない方には新しい展示もあり、懐かしい寅さんの世界が広がっています。

柴又は浅草、上野からもそう遠くありませんので、首都圏にお住まいの方や上京する際には、気軽に足を伸ばしてみたいかたがたでしょうか。下町特有のホッとさせる懐かしい風景に出会えることと思います。



寅さん記念館にある撮影用のセット。撮影用のため天井の板はありません。まさに映画で見た世界が眼前に広がります。



寅さん記念館の裏に広がる江戸川。この河川敷もよく映画で登場しました。有名な矢切の渡も近くにあります。

(岡山大学職員組合 組合だより 182号より再掲)

おわりに

第2回の今回は、首都圏の旅行記を2編ご紹介しました。柴又の記事は、岡山大学職員組合の組合だよりへの20回目の連載を迎えた際に、記念号外企画として執筆したものです。

この旅行記は組合だよりへ「ローカル線で行く！フーテン旅行記」というタイトルで連載されており、また小生の容姿がどことなく寅さんに似ていると言われることがあるので、記念企画には柴又を紹介しようと連載開始時から決めていました。組合だよりに掲載された当時の旅行記を見ると「この旅行記も、おかげさまで20回目の連載を迎えることができました。タイトルに『フーテン』の字を入れたのは、全国を旅行して広く親しまれた寅さんのように、この旅行記が読者の皆さんに様々な地方の情報をお届けして旅情を感じていただき、組合だよりの一服の清涼剤として親しまれる連載になってほしいという願いからです。

これからも楽しい記事を提供して参りたいと思いますので、ご愛読いただきますようお願いいたします。」と結んでいます。まさに、この連載に対する筆者の思いそのものであり、この気持ちを大事にして、記事を提供していきたいと考えています。

次回は、夏休みにふさわしい旅行記をお届けします。お楽しみに。



雨中の発車待ち。沛然と雨が降る中、発車を待つ地下鉄車両。屋根からは水煙が見えます。梅雨時の夕方に見かける光景です。(2009年 筑肥線 筑前前原駅にて撮影)